

(5) 海洋文化の普及

大阪市は、大阪の歴史上大きな意味を持つ海洋文化の普及を目的に、1980年代から世界の帆船やヨットを迎えて、国際イベントを行ってきました。その集大成として、本市はセイルトレーニング帆船「あこがれ」を平成5年に建造し、大阪市民をはじめ日本全国、海外の参加者を乗せ、航海してきました。現代の日本社会が必要とするグローバルな視野を持つ人材育成など、セイルトレーニングプログラムを通じて、社会貢献に取り組んでいます。



■メルボルン／大阪ダブルハンドヨットレースの様子（2007年）
出典：大阪市港湾局資料



■大阪市の帆船「あこがれ」
出典：大阪市港湾局ホームページ

6 協働

大阪市では、高い自治意識により、市民主導によるまちづくりが行われており、水環境に関する取組をみても、これまで様々な地域に根ざした協働事業が展開されています。例えば、市民、NPO、行政などが連携し、クリーンアップ活動や打ち水などのイベントを実施しており、各主体が連携する機運が高まっています。しかし、各種情報が共有できていないなど、各主体間の連携が十分ではありません。



■淀川フィールドワーク「干潟に学ぼう！干潟で遊ぼう！」の活動風景
出典：大阪市淀川区役所ホームページ



■平野川ウォールペインティング
出典：大阪市生野区役所ホームページ

7 下水道

下水道は、快適な市民生活を支える都市の最も基本的な施設であり、家庭や工場などから排出される汚水を処理して、河川や海域へ放流し、水質を保全することや浸水を防除することなど重要な働きがあります。

大阪市ではコレラの流行が契機となり、明治27年に近代下水道の整備が始まりました。

現在、大阪市には12下水処理場、下水汚泥を集中処理する舞洲スラッジセンター、そして58箇所の抽水所*があります。

処理区域面積は19,050haとなっており、他都市分を含め1日に284万4千 m^3 の下水を処理することができます。また、下水処理区域人口は265万5千人、普及率は99.9%となっています。市街化が進行する以前は地面に浸透、あるいは河川に自然流出していた雨水が、市街化の急速な進行により、下水道で河川や海域へ人工的に排水されています。市内には、下水道管が網の目

*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。

のように張り巡らされ、その総延長は4,867kmとなっています。1時間あたりの降水量60mmというほぼ10年に1回の大雨でも浸水しないことを目標に整備を進めていますが、このような下水道整備が完了した区域の比率を表す雨水対策整備率は、77.9%となっています。

また、分流式下水道*と比べて少ない費用と短い期間で整備できる利点があることから、古くから下水道の整備を進めてきた大都市では合流式下水道*が多く採用されており、本市でも市域の約97%が合流式下水道で整備されています。

合流式下水道では、雨の強さが一定の水準を超えると、雨水とともに汚れの一部やごみなどが河川などに直接放流されるため、水質汚濁の原因のひとつになります。このため、放流される年間の総汚濁負荷量を分流式並みにするために、様々な「合流式下水道の改善対策」を実施しています。(文中の数値は平成21年度末現在)



■大阪市の下水道処理区
出典：2010大阪市の下水道（大阪市建設局）より作成

*の付いている語句は、巻末資料で解説を記載しています。

第2節 大阪市の水環境に対する市民意識

平成20年度に実施した市民アンケート調査結果によると、「親しみを感じる水辺」や「川や池、海の水のきれいさ」に対する市民満足度は低い結果となっています。そして、実際の水質と市民の抱く印象に隔たりがあります。

また、市民の水環境に対する要望としては、河川や海域のごみの除去、水質浄化、水辺空間の整備などが上位に挙げられています。

- ・現状の大阪市の水環境に対する市民満足度は低い。
- ・実際の水質と市民の抱く印象に隔たりがある。
- ・水質浄化、ごみの除去、水辺空間の整備への期待が大きい。

